慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	三田史學研究會例會報告
Sub Title	
Author	
Publisher	三田史学会
Publication year	1941
Jtitle	史学 Vol.19, No.4 (1941. 3) ,p.138(722)- 140(724)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	彙報
Genre	
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19410300-0138

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

報國寺藏

正午同館を辭去した一行は、鈴木屋旅館で中食をすませ、午後一時過ぎ再びバスに乘り、二階堂醫王山の麓にある官幣中社鎌倉宮に參拜し、此所でバスを捨て、谷間の小道を小雨に濡れ乍ら北方へ徒歩で六七町、建保年間北條義時の建立と傳へる覺園寺に至る。突然の參叩にも拘らず、大野住職の非常な歡待を受け、左の寺寶を拜觀した。

一、石造寶篋印塔　正慶元年壬申仲冬廿七造立開山大和尚の刻文あり　一基
一、大燈和尚塔　正慶元年壬申仲冬廿八の刻銘あり　一基
一、木像地藏菩薩（俗稱黑地藏）　鎌倉時代
一、木像愛染明王像　鎌倉時代　一軀
一、木像藥師如來像　鎌倉時代　一軀
一、銅造不動明王像　鎌倉時代　一軀
一、後醍醐天皇御木像　高村光雲作
一、木札

午後二時半覺園寺を辭去再び元來た道を戻り、宅間ヶ谷にある報國寺に赴いたのであつたが塾よりの紹介狀が未着、且つ住職不在で、寶物觀覽の用意なき由で、せん方なく、次の機會に讓り、更にこれも突然であつたが同寺を距る二三町にある天平年間行基の創建と傳へ、坂東三十三番札所第一番の杉本寺を訪ねる。

こゝも生憎住職が法要の爲め不在で國寶十一面觀世音の御開帳が出來ず、暫時御堂に休みながら待つ。境内は老杉木鬱蒼と茂り御堂前の石段は苔に覆はれ、いかにも古刹の面影がしのばれる。

ふと見ると小さな御詠歌の額が掛つてゐる。「頼みあるしるべなりけり杉本の誓ひは末の世にもかはらじ」と。

五時になつたが、住持はまだ歸られぬ。そこで先生が木魚の伴奏で住職の代理を勤められ、御開帳をする。一同ローソクの火で本尊、脇侍を拜觀する。孰れも木造の立像で、中央の御本尊は慈覺大師の作と傳へ對好圓滿莊重な作である。右にあるのは行基の作と傳へ一木の古拙な像である。左にあるのは惠心僧都の作と傳へ兩手に來迎の印を結んで、上下に捌き、その姿體極めて優美である。中央と左との二體は國寶に指定されてゐる。

かくて五時すぎに同寺を辭去し、急ぎ徒歩で鎌倉驛に向ふ、プラットホームで小泉塾長に御會ひする、五時五十分鎌倉發の電車で一同歸京の途に就いたのである。當日は殘念なことに天候に惠まれなかつたが、近距離の見學であつた爲め樂な氣持ちで各自史囊を肥し得たのは何よりであつた。茲にこの旅行記を擱筆するに當り各所に於てうけた御厚意に對し深く感謝の意を表する次第である。（淺村一郎記）

三田史學研究會例會報告

昭和十五年

五月七日（火）午後四時於昧ノ素ビルアラスカ（第三百回例會）

前漢に於ける都市の治安問題　黑田　豐成君

曆の話　幸田　成友氏

五月二十一日（火）午後三時於交詢社内慶應倶樂部談話室

（第三百一回例會）

三國時代の佛教に就いて　巨橋　英君

墾田について　今宮　新氏

六月四日（火）午後三時於交詢社内慶應倶樂部談話室

（第三百二回例會）

ロレンツオ時代に於けるフロレンスのヒユマニズム　姜　大良君

十九世紀末より二十世紀初に至るまでの獨逸と露國及英國　齋藤清太郎氏

六月十八日（火）午後三時於交詢社内慶應倶樂部談話室

（第三百三回例會）

安南都護史高駢　雨宮　七郎君

西洋天文學の支那と日本とに及ぼせる影響　後藤　末雄氏

七月二日（火）午後三時於普通部會議室（第三百四回例會）

漢代に於ける鹽鐵問題に就いて　那波金二郎君

陸前氣仙郡地方調査所見　大山　柏氏

十月三日（木）午後三時於普通部會議室（第三百五回例會）

寛政異學の禁と松平定信　宮島　貞亮氏

十月十五日（火）午後三時於普通部會議室（第三百六回例會）

米國のカリビアン政策に就いて　淺野　榮三君

一八五七年の印度人の叛亂に就いて　林　桂次郎君

蘭印の印象　伊丹榮七郎氏

十一月十四日（木）午後三時於交詢社内慶應倶樂部談話室

（第三百七回例回）

英國に於ける初期劇場の事情　吉野　義男君

五人組帳の資料としての價値　野村兼太郎氏

十一月廿六日（火）午後三時於普通部會議室（第三百八回例會）

エラスムスの新約聖書に就いて　積田　俊夫君

バグダード鐵道問題　鈴木喜三郎君

科學制度の沿革　竹田　龍兒氏

十二月十日（火）午後三時於三田萬來舍集會室（第三百九回例會）

歴史的に見たる日濠關係　赤澤　眞人君

謚法の沿革　伊藤　武夫君

第二次世界戰爭の始まる頃　芦田　均氏

昭和十六年

一月二十八日（火）午後三時於三田萬來舍集會室

（第三百十回例會）

使徒時代より中世初期に到る教會音樂及びグレゴリオ聖歌に就いて　江上　次郎君

「都鄙問答」に於ける石田梅巖の町人の營利思想に對する意見　近江　義光君

南京雨花臺の六朝墳と近傍の甎瓦　保坂　三郎氏

二月八日（土）午後二時於日比谷東洋軒（第三百十一回例會）

卒業論文披露兼送別會

源頼朝の擧兵を論ず　宇山　雅陽君

奇兵隊の本質　曾我　隼三君

永仁の德政とその原因について　永見　良君

漢代に於ける都市の發達に就いて　黒田　豐成君

北支に於ける農業衰退の一考察　水口　民世君
漢代に於ける鹽鐵問題に就いて　那波金二郎君
筆墨硯起源考　岡田平太郎君
南詔の歴史的發展と唐との抗爭　雨宮　七郎君
江南穀輸送より見たる元代の漕運に就いて　三好　健一君
支那佛敎の江南傳に就いて　巨橋　英君
コペルニクスと其の時代　水町　龍雄君
直轄領以後の印度政府組織の一部に就いて　林　桂次郎君
ロレンツオ時代に於けるフロレンスの政治的考察　姜　大良君
汎米主義の變遷に就いて　淺野　榮三君
第一次世界大戰直前の歐洲外交の研究　增澤　直君

第十九卷　第四號　（七二四）